

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 68

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

医学部長就任のご挨拶

福岡大学医学部長 朔 啓二郎

平成25年12月1日より医学部長に就任しました。多くの教授会メンバーからご支持をいただきましたこと、有り難く感謝しています。私は、福岡大学医学部第1回卒業生（昭和53年）です。私が入学した41年前の福岡大学は、道路も舗装もされておらず田舎にあるキャンパスの印象が強かったのですが、今では日本で初めての地下鉄直結型大学病院新診療棟が開設され、都市高速が走り、交通アクセスが良い都市型大学になってきました。また、医学部人気も相まって多くの受験生が入学を希望する明るく楽しい大学になってきたことを肌で感じています。ハードや環境は整ってきたのですが、医学部の在り方、方向性をもっと明確化・活性化したいと考えています。臨床講座の視点から考える医学部の構築は、私が強調できることと思っています。

学部教育

医学生としての自覚を引き出すプログラムが重要だと感じます。Passive から active な医学生へ、そのような学習態度を引き出すには、学問や自然に対する敬意・畏敬の念を常に感じさせることだと考えます。臨場感のある生命や医学の実践的教育が必要です。そのためには、学部と病院を一体化した取り組み、ロールプレイによる全体の底上げ、クリニカルクラークシップの充実などがポイントです。専門医制度も変革期にあるため、卒後臨床研修や総合診療との関連を重視し、カリキュラムの改革に臨床医として様々な提案をしたいと思います。国家試験合格率低迷からの脱出は避けられない課題と認識していますが、長期的、短期的

に問題解決に向かって努力します。医学部教官の増員の要求、医学部国際認証や品質保証のための

様々な取り組みにチャレンジしていく所存です。優秀な学生を得るための入学制度の見直しや、医学部授業料減額交渉等の課題は積極的に勧める必要を感じます。

研究・研究組織の活性化

研究は医学部の最大のミッションで、研究無くして教育は無いと考えます。大学院の充実、基盤的研究や先進医療を駆使した医療、研究マインドを中心とした、もっと華やかなライフイノベーション研究や組織作りを皆さんと目指していきたいと考えます。倫理的に正しい研究プロジェクトを立ち上げ、COIを理解し、生物統計や新技術を駆使して、臨床研究をプロデュース・マネジメントできる人材育成にも医学研究科と共に力を注ぎたいと存じます。医学研究においては、世界のサイエンスの中での自分たちの立ち位置を知るのも必要です。外の世界をみて交わることができるよう、留学や国内外の大学との交流を活性化するプログラムを企画します。

せっかくの役職ですので、過去41年間の教育、研究のアウトカム作りを具体的に推進する覚悟です。また、大学の機能強化・ガバナンスの在り方が問われている時代ですので、乗り遅れないよう取り組みたく思っています。医学科卒業生3,720名を輩出した母校医学部の発展のために尽力したく、ご指導のほどよろしくお願いいたします。





診療・教育・研究のバランスのとれた 特定機能病院を目指して

福岡大学病院長 田村 和夫

昨年12月に病院長に就任しました。福大病院開設以来初の内科系の病院長と聞いています。2001～2005年まで副病院長をしており、8年ぶりの病院執行部への復帰です。その間、学務委員長や研究科長など主に大学院生の世話役をつとめ、研究推進と大学院生教育の実質化に努めました。

ご存知のように病院の経営状態は必ずしも盤石ではなく、累積赤字もあります。収支改善に経営努力をする一方で、特定機能病院として学生や若手医師の教育、先進医療の推進、臨床研究の実践と成果が求められています。これからみなさんと一緒にやっていきたいいくつかの項について記載します。

まず、
①新診療棟が2011年に開院、昨年3月に本館リニューアルが終了しハード面は整いました。病床も915床に増加、それに伴い多くの新人スタッフが入ってまいりました。彼らの教育と縦・横の連携、チーム医療の充実が喫緊の課題です。継続してソフト面の強化が必要です。

②昨年4月から始めました二次救急は関連診療科、部門と協議し本年4月にも新たな体制を構築し、研修医、若い医師の教育の場としたいと考えています。

③安全で精巧な手術を可能とする医療用ロボット「ダ・ヴィンチ」を導入する予定です。まず、泌尿器科領域の前立腺の手術に応用されることとなります。将来は婦人科、消化管外科領域にも拡大される予定です。

④専門医制度が変わります。内科では認定医制度が無くなり、新・内科専門医制度が導入されます。新・内科専門医を目指す者は、主だった内科専門領域を経験しないと専門医資格が得られなくなります。2017年初期研修を終了する医師からは当院の7つの内科をローテーションしなければ経験すべき症例の蓄積ができません。この機会を捉え、当院内科の研修制度を前倒しで変更することを検討しています。他領域の専門医制度も変わることが予定されており、その変更に沿った形で、卒後研修センターが中心に対応してまいります。

⑤M5、6の病棟実習時間ならびにクラークシップの延長が図られ、それに対応すべく病院の実習体制も整えていきます。

⑥臨床研究支援センター、卒後臨床研修センターと医学部・研究科が協力して臨床研究の推進に努め、特定機能病院の要件の一つである英語論文100本/年以上をクリアしたいと思います。日常診療の中には分からない、解決しないといけな課題や疑問が多くあります。それをただ放置することなく、研究マインドで解決すべく努力することは当然、医学の発展に寄与し、最終的には患者さんのためになります。その結果、peer reviewのある英文雑誌に論文として掲載されることとなります。また電子カルテの中にはまだ活用されていない大量の情報（メガデータ）が埋もれています。医療情報部とその利用法を考えましょう。

このように経営改善に軸足をおきつつも、診療・教育・研究いずれも成果が得られるバランスのとれた特定機能病院を目指していきたいと思います。一緒にやりましょう。

祝 福岡大学医学紀要第40巻 優秀論文賞

濱中 和嘉子(呼吸器・乳腺内分泌・小児外科)

「網羅的遺伝子発現解析およびタンパク発現解析による小細胞肺癌の予後因子についての検討」

渡邊 隆(消化器内科学)

「New Fecal Biomarker, α 1-acid Glycoprotein, for Evaluation of Inflammatory Bowel Disease: Comparison with Calprotectin and Lactoferrin」

学位取得

次の方は、平成25年10月1日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

課程修了による学位取得者

» 佐藤 絵美(先端医療科学系)

論文提出による学位取得者

» 鶴身 小都絵(筑紫病院消化器内科 助手)

» 高良 真一(放射線医学 助教)

» 柏木 正之(法医学 助教)

» 橋本 竜哉(消化器外科学 助教)

» 藤田 貴子(小児科 助教)



筑紫病院長に就任して

福岡大学筑紫病院院長 向野 利寛

12月1日付けで筑紫病院長に就任した向野です。専門は眼科です。私は1990年4月から福大にお世話になっています。当初は七隈にいましたが、筑紫病院に眼科を開設するのに合わせて筑紫病院に移りました。その頃の病院

は手狭で、エアコンの効きが悪く、夏暑く冬寒い病院でした。この頃から病院を新築したいとの願望がありましたが、なにせ赤字病院であり可能性はほとんどありませんでした。また、筑紫地区の医師会との折り合いも悪く、福大筑紫病院がここにある意味があるのか、といった意見も聞かれました。一時は閉院するとの話もありました。何とか赤字から脱したいとの強い思いから、八尾病院長・田中病院長が大なたを振るわれ、病棟の改築と共に救急医療を開始して救急車の受け入れを始めました。さらに病棟使用の効率化を図るために、病棟の再編、全病床の混合化を進めました。この結果、平成12年以降病院経営は黒字基調となりました。また、地域医療機関との連携を進めるために、地域医療連携室を作りその最初の室長として活動もしました。これらの努力の甲斐あって平成19年4月に地域医療支援病院の認定も受けることが出来ました。さらに岩下病院長をはじめとした病院執行部の努力もあり、平成25年5月7日に新病院の開院にこぎつ

けました。筑紫病院の診療部長をはじめ、医師・看護師・医療技術職員・事務方など全員が同じ目的意識を持ってやってきた結果と考えています。また、同窓会を含めて大学、医学部関係者のご理解、ご支援があったからこそ、と感謝しています。建物の新築によって広さは1.8倍になり、病棟は広く快適です。病室は個室と4人部屋のみです。また、外来診療にはかなり余裕ができました。病院食は美味しく、患者さんからも好評です。しかし、筑紫地区の容積率の関係から、医師のいる場所が狭い状態となりました。准教授でも二人一部屋です。この状態の改善が喫緊の課題と考えています。

福岡大学筑紫病院は福岡大学メディカルゾーンの一員ではありますが、福岡大学病院とは目的、性質が少し異なります。筑紫地域約45万人の医療圏の中心病院として、最新の医療を提供しつつ地域の医療を支える役割があります。これらの役割を自覚しながら旧病院に比べて約1.8倍に広がった建物をうまく利用して質の高い医療を提供してゆきます。その結果として収益性が高まり、さらに多くの投資ができて全職員が喜んで働ける良い職場環境を整えて病院の価値が高まれば良いと考えています。また、筑紫病院はその大きさからして使い勝手の良い病院と思います。福岡大学病院とはもちろんですが、他の学部と連携して医療に関する経営などの現場としても利用してもらえれば、とも思っています。

七隈からは離れた場所にありますが、今後も福岡大学の一員としての自覚を持って、地の利を生かしてしっかりと立場を固めてゆく所存です。今後とも宜しく願い申しあげます。

福岡大学医学会第69回例会報告

日時／平成26年2月25日(火) 18:00～19:20
場所／医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事 三宅 吉博

- 1)開会の辞 集会幹事 三宅 吉博
- 2)会長挨拶 医学部長 朔 啓二郎
- 3)新任講演 座長…朔 啓二郎 講演25分、質疑応答5分
講演者…山本 聡(筑紫病院 外科 准教授)
「胸部外科領域における胸腔鏡手術について」
- 4)福岡大学医学紀要40巻優秀論文賞授与式
受賞者…濱中 和嘉子(呼吸器・乳腺内分泌・小児外科)
渡邊 隆(消化器内科学)
- 5)受賞論文の要旨講演 講演10分(質疑応答含む)
講演者…濱中 和嘉子 座長…岩崎 昭憲
「網羅的遺伝子発現解析およびタンパク発現解析による小細胞肺癌の予後因子についての検討」
講演者…渡邊 隆 座長…向坂 彰太郎
「New Fecal Biomarker, α 1-acid Glycoprotein, for Evaluation of Inflammatory Bowel Disease: Comparison with Calprotectin and Lactoferrin」
- 6)閉会の辞 集会幹事 三宅 吉博



講演された先生方を囲んで(左から朔医学会会長、山本先生、岩崎先生、濱中先生、渡邊先生、向坂先生、三宅先生)

新風

平成25年10月1日付けで
昇格された方に自己紹介を
していただきました。

new phase



病理学講師
二村 聡

人類初の月面着陸で世界中が賑わった昭和44年の冬に黒ダイヤこと筑豊三池鉱山で知られる田川後藤寺で生を受け、霊峰英彦山を眺めながらゆったりと育ちました。平成7年に久留米大学医学部医学科を卒業後、直ちに東京慈恵会医科大学第一病理学教室に入局しました。ここで、石川栄世名誉教授、牛込新一郎教授、高木敬三教授から病理解剖と外科病理学の基本中の基本は言うまでもなく、学問に対する姿勢や人間性に関する哲学、さらには先輩と後輩医師に対する礼節、身だしなみに至るまで徹底的に叩き込まれました。その間、指導医の誠実でまっすぐな生き方(いわば病理医の佇まい)と真の優しさに触れるうちに、“医学は厳しく医療は温かく”という信念を抱くようになり、腰をすえて病理診断学の基礎を学ぶことが出来ました。生涯忘れえぬ臨床医にも恵まれました。以来、外科病理学一筋に診療と教育に従事する傍ら、同分野の研究を行ってきました。ちょうど国立がんセンター中央病院で消化管病理診断学を専攻し始めた頃、岩下明德教授(現福岡大学筑紫病院病理部長)と運命的に出会う機会が訪れました。やがて福岡で病理診断学を根底から学び直したいという気持ちが芽生え、多くの方々のご支援のもと平成16年10月に現病理学講座(当時岩崎宏主任教授)に赴任いたしました。以後、診療面では消化管疾患の病理診断を中心に研鑽を積んでまいりました。そして、この度、竹下盛重主任教授ならびに鍋島一樹主任教授のご推挙により平成25年10月に医学部講師に昇格いたしました。ご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。閑話休題。われわれ病理医にとって、日々の病理診断のほか、卒前・卒後の教育も重要な使命と考えております。従来、定義の学問とも言われる病理学の講義や実習のあり方を再考しつつ、教員としての自覚をもち真剣に取り組む所存です。学生教育(講義・実習)では、ただ漫然とスライド映写せず、板書を多用するなど少々工夫しています。その結果、学生主催のアンケート調査ではこれまで計三回ベストレクチャーに選出されました。卒前教育には情熱と度を越えない愛情が必要です。今後も威圧的な態度を厳に封印し、医学生肉声に耳を傾け、教育現場に活かす所存です。他方、卒後教育としては赴任以来、毎週火曜日と金曜日の早朝に病院

地下の一角で消化管外科切除標本の肉眼所見会を粛々と開催してきました。いまでは臨床医を交えて有意義な意見交換がなされるようになりました。肉眼所見から組織構築を一定の根拠をもって推定し、それを組織学的に検証する作業を絶えず繰り返すことが消化管病理診断学の真骨頂です。この思考過程は消化管の画像診断の基礎となっていると確信しています。この小規模な所見会が若き臨床医にとって病理学的思考を身につける絶好の場となっているのであれば望外の喜びであり、病理医冥利に尽きます。消化管疾患の病理診断学領域で何かお役に立ちそうなことがございましたら、いつでも連絡してください。最後に唯一自慢できる特技はハヤ釣りです。趣味は静物の描画、手書き文字文化と抽象芸術論関連図書の耽読そしてマクロ写真撮影です。もとより浅学非才であります。が、微力を尽くし精一杯努力し福岡大学に奉職する所存でございます。繰り返して、宜しくお願い申し上げます。



循環器内科講師
今泉 聡

このたび朔啓二郎教授のご推挙により、福岡大学循環器内科講師を拝命いたしました。私は平成14年に福岡大学医学部を卒業後、循環器内科に入局し福岡大学病院で二年間の臨床研修をいたしました。大学院では朔啓二郎教授、三浦伸一郎診療教授のご指導のもと、高比重リポ蛋白の多面的作用をメインテーマに研究を行い、学位を取得いたしました。その他にも、アンジオテンシン受容体拮抗薬のインバースアゴニストに関する研究や、ACE阻害薬の心臓の側副血行路発達に関する臨床研究など様々な研究をご指導頂き、すばらしい環境で楽しく修業することができました。その時に行った多くの学会発表は、忘れられない経験であるとともに、私の貴重な財産となっております。

平成20年にはカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に留学させて頂き、動脈硬化の最新治療と人工的に合成したアポA-I模倣ペプチドの研究に携わりました。そこでも多くの人たちの助けにより、充実した研究生活を送ることができました。

帰国後2年半以上の月日が経ち、福岡大学での新しい仕事にも少しずつ慣れてきました。今後は診療、研究、教育において、更に力を尽くしていく所存です。自分が福岡大学や地域社会、患者さんや後輩の学生、医師たちにどのような貢献ができるか、常に考えていきたいと思っております。診療では患者さんへ最高の医療を提供できるように知識、技術を身につけるだけではなく、患者さんへの思いやりなど自らの心も磨いていくことが重要ではないかと思います。研究では大学のメリットを生かし、基礎研究と臨床研究及び、それらをつなぐト

ランスレーショナルリサーチができればと思っております。直接の成果である論文作成はもちろん、世界に発信できるような新たな知見を見つける努力を怠らず、また他の研究者や後輩が成果をだし成長できる助けができるように努めていく所存です。教育に関しては、学生の医学的興味とモチベーションを高め、自分で勉強していく姿勢ができるように努力していきたいと思います。現在の自分があるのは、多くの先生の暖かいご支援があったからだとし心より感謝しております。未熟ではありますが、他の方々に少しでも貢献できるよう尽力していく所存です。よろしくお願い申し上げます。



脳神経外科講師
勝田 俊郎

昭 和62年に九州大学医学部を卒業し、同時に九州大学脳神経外科に入局、その後、関連病院・大学院(臨床神経生理)・留学(フロリダ大学にて手術解剖を研究)を経験しました。

留学後は九州医療センター3.5年、国立嬉野病院(現 嬉野医療センター)3年などを経て、直近の9年間は北九州市立医療センターに勤めておりました。

ご縁があり昨年6月に福岡大学病院に参り、助教として脳神経外科に着任しておりましたが、このたび、井上亨教授のご推挙により講師を拝命いたしました。大学病院よりは市中関連病院勤務のほうがずっと長く、まだまだ大学病院ならではの勝手や「おきて」がわからずに右往左往する場面もあるかと思いますが、今まで経験してきたことを生かし、診療面・教育面ともにお役に立てていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



循環器内科講師
杉原 充

こ のたび朔啓二郎教授のご推挙により循環器内科講師を拝命致しました。2001年に福岡大学医学部を卒業し、学生時代より循環器内科医としての道をとっておりましたので、すぐに当時の内科学第二講座に入局致しました。研修医時代を福岡大学病院で過ごし、その後、幅広い循環

器領域の中でも特にカテーテル治療について興味を持ち、関連病院でもあり、福岡市近郊では随一のハイボリュームセンターである福岡徳洲会病院循環器内科での部外修練を行い、その後、国立病院機構九州医療センター救急部を経て、大学院へ進学し2012年に小血管に対する冠動脈ステント留置術に関する臨床研究を行い学位を取得致しました。その間、非常に多くの臨床経験をさせて頂き、現在はそれを生かし、全身動脈硬化病の一つであります下肢閉塞性動脈硬化症に対する血管内治療を中心に形成外科、心臓血管外科、糖尿病内科の先生方とご協力させて頂き、包括的なマネジメント、下肢救済に向けて取り組んでおります。また今後はそれを形として福岡大学より発信するため臨床研究を随行、治療成績の向上に力を注いで行きたいと考えております。ここに至るにあたり、母校である福岡大学学生時代より、多くの先生方に頂いたご指導によるものと大変感謝しております。この場をお借りして御礼申し上げます。

また医学教育についてですが、自分はどうかだったのかという決して真面目な学生生活を送ってはいませんでした。しかし、その時の経験や反省、善し悪しを思いながら学生と向き合い、まずは医師国家試験合格、そして熱意を持って取り組む若手医師を育てて行けるよう頑張っていきたいと思っています。私自身も医師として今一度、日常診療、研究、教育を中心に現在おかれた環境、立場と真摯に向き合い研鑽していこうと決意致した所存でございます。今後共どうぞよろしくお願い致します。



病理部講師
濱崎 慎

鍋 島一樹教授、竹下盛重教授両先生のご推挙によりこの度福岡大学病院病理部講師を拝命致しました。平成九年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学病院第二外科、国立病院九州医療センターで臨床研修をさせて頂きました。平成11年に福岡大学大学院へ進学、筑波大学病理学教室へ国内留学し、管間博先生のもとで肺癌のテロメア関連蛋白発現に関しての研究を行い、学位を取得いたしました。また大学院在学中に外科時代の指導医をして頂いた秀島輝先生のご尽力により、ボストンのDana-Farber Cancer Institute, Jerome Lipper Multiple Myeloma Centerへの留学の機会を頂き、秀島先生のもとで多発性骨髄腫に対するnovel drugの研究を行いました。平成16年の帰国を機に、大学院時代にお世話になりました福岡大学病理学教室に入局し、肺・胸膜腫瘍や乳腺腫瘍をはじめとする固形腫瘍を中心に、外科病理診断の立場から医療への貢献を目指すこととなりました。

病理診断は治療方針決定には必要不可欠なものです、

病理医の仕事内容はあまり周囲に詳しく認識はされていないのが現状のようです。また病理医自体の数も他の臨床医に比べると圧倒的に少なく、全国でその育成が急務とも考えられています。個人の力は限られているかもしれませんが、診療・研究・教育を通して、特に若い世代の方たちにより病理診断の重要性を知って頂き、病理を目指してくれる方が増える様に努力していきたいと考えています。

福岡大学病院という恵まれた環境で仕事を出来ることに感謝をしつつ、病理診断が患者さんの治療に最大限貢献できるように日々研鑽、努力を重ねていきます。これからも御指導、御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



呼吸器・
乳腺内分泌・
小児外科
濱武 大輔

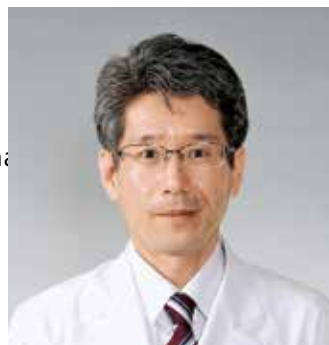
呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の濱武です。僕は1968年に当時父の職場でもあった福岡市の国立中央病院（現九州医療センター）で生まれ、その後高校、大学まで福岡の地で進学いたしました。高校時代は茶道やピアノ、美術館巡り等に熱中しておりインドな生活を送っていましたが、福岡大学医学部在学中は漕艇部（ボート部）で熱い青春時代を楽しみました。よき思い出です。大学卒業とともに当時の白日高歩教授先生（現、福西会病院理事・院長）率いる福岡大学第2外科学講座へ入局させていただき、消化器外科医を目指し研修する毎日が始まりました。医師6ヶ月目には久留米の新古賀病院へ移り外科医としての基礎を十分学んだ2年間を過ごしました。入局して5～6年目を迎える頃、食道外科に携わる機会が増えるにつれ胸部領域の外科に興味を抱くようになり、それを契機に呼吸器外科の道を歩む決心をいたしました。2003年からの4年間は国立福岡東医療センターの呼吸器外科に勤務して肺癌、縦隔疾患、胸膜疾患、肺嚢胞性疾患（気胸など）に加え結核や膿胸などの感染外科の症例にも多く携わる機会を得て呼吸器外科医として成長させてもらいました。現在は大学へ戻り岩崎昭憲教授のご指導を仰ぎながら日々呼吸器外科道を極めるべく修練しております。学位は臨床リサーチとして1cm以下の微小肺癌150例ほどをまとめた論文「Surgical outcomes of lung cancer measuring less than 1 cm in diameter」で医学博士を取得いたしました。昨年春には岩崎教授、病理学の鍋島一樹教授のご厚意をいただき米国ハワイ州のQueens medical Center病理部へ留学させていただきました。慣れない分野での勉強とはなりましたが大変貴重な経験を積むことができました。昨年9月に米国シカゴで開催されたAmerican Society for Clinical Pathology (ASCP) 2013年学会で胸水細胞診の演題が採択、また今年3月に

米国サンディエゴで開催されるUnited States and Canadian Academy of Pathology (USCAP) 2014年学会では悪性中皮腫の免疫組織学的な検討の演題発表が決まり、留学で学んだ結果を残す事ができたと考えております。これまで多くの先生方に指導いただき頑張ってきました。これからも日々精進いたしますので宜しくお願い申し上げます。



臨床検査部講師
松本 直通

このたび福岡大学病院臨床検査部講師を拝命いたしました。平成3年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学第二内科に入局し、二年間の研修を経て、当時の荒川規矩男教授のご指導の下に、重症の冠動脈疾患患者に対する急激な降圧は、かえって冠動脈血流を低下させ、虚血性変化を誘発する危険因子となり得ることを仮説とした臨床研究を行い、学位を取得致しました。その後は熊谷浩一郎先生のご指導の下に不整脈診療に携わるようになり、平成15年には、朔啓二郎教授、熊谷先生のご配慮を得まして、アメリカのクリーブランドに2年間留学させていただき、電気生理学的研究の貴重な経験をさせていただきました。平成21年に循環器内科から臨床検査部に異動となり、松永彰教授のご指導の下に循環機能生理検査に関する学生教育、検査業務の傍ら、不整脈診療に従事してきました。自分の今があるのは、ひとえにこれまでお世話になった諸先生方のご指導のおかげであります。この場をお借りして深く御礼申し上げます。もう若くはない年齢ですが、自分の経験を経て、発表、論文を経て情報発信すること、その姿勢を持ち続けることの大切さを若い先生方にはぜひ知ってもらい、それを大学にいる間に少しでも伝えていければと考えております。今後もお役にたてるよう、努力する所存でありますので、どうか今後ともよろしくお願い致します。



筑紫病院
小児科講師
井上 貴仁

このたび福岡大学筑紫病院小児科講師を拝命いたしました。生まれは山梨県で、医者とは無縁の家庭で育

ち、高校卒業まで山梨で過ごしました。昭和61年福岡大学医学部に入学し、縁もゆかりもない福岡の地に、入学当初は戸惑いもありましたが、先輩、同級に恵まれ充実した学生生活を送ることができました。

平成4年に福岡大学を卒業後し、その暖かな雰囲気惹かれ福岡大学小児科学教室に入局し研修医生活をスタートしました。諸先輩からあたたかい(時に厳しい)ご指導をいただき、小児医療のやりがいを肌で感じる事ができました。その後満留昭久福岡大学名誉教授のご指導のもと小児神経学を学び、平成7年から4年間九州大学大学院で、ウイルスベクターによる遺伝子治療の基礎研究を、平成18年には福岡大学病院遺伝医療室の開設に伴い、副室長を仰せつかり小児科診療を行いながら遺伝カウンセリングを行ってきました。平成22年から民間病院で3年間小児科部長として、地域医療に根ざした一般小児科診療、救急医療に携わってきました。これらはいずれも私にとって貴重な経験となり、かけがえのない財産となっております。現在の自分があるのは、多くの先生方のご指導と同僚や後輩の協力のおかげで感じています。この場を借りて皆様に心より感謝申し上げます。

これまで小児神経専門医、てんかん専門医、臨床遺伝専門医として、小児神経疾患、遺伝性疾患、てんかん患者さんを診療してきた経験を生かし、今後も単に疾患の治療に終わらず、その子ども、家族の視点に立った診療を実践していくことはもちろんのこと、若手の先生や医学生とは、共に考えながら小児科の醍醐味を伝えていきたいと思っています。はなはだ未熟者ではございますが、今後とも、より一層のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



筑紫病院
循環器内科講師
東條 秀明

浦 田秀則教授のご推挙によりこの度福岡大学筑紫病院循環器内科講師を拝命いたしました。福岡県北九州市出身、平成6年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学病院と国立病院機構九州医療センターで2年間の臨床研修をいたしました。平成8年より荒川規矩男先生の第二内科(循環器・代謝・呼吸器・腎臓膠原病内科)に入局し、循環器の道に進みました。福岡大学救命救急センター所属後平成9年に第2内科に戻った後より、熊谷浩一郎先生ご指導のもと不整脈、特に専門治療としてカテーテル心筋焼灼術やペースメーカー植え込み手術を中心として現在まで臨床および研究に従事してまいりました。その中でも、心房細動・粗動をメインテーマに掲げ、治療・学会発表を含む研究に携わり、最先端の修練を積むことができ平成18年には朔 啓二郎教授ご指導にて学位

も取得させていただきました。その間、部外修練としましては、平成10年から九州医療センターで1年間研修した後、福岡大学病院第二内科に戻り、平成12年からは福岡歯科大学医科歯科総合病院循環器内科、平成15年からは福岡済生会病院に勤務となりました。そこでは不整脈の専門分野のみならず、経皮的冠動脈形成術にも専念することが可能となり、循環器医師として幅広い技術を身につけることができました。その後平成20年から福岡大学筑紫病院循環器内科で浦田秀則教授のもと医療・研究・教育に携わってまいりました。現在に至るまで非常に恵まれた環境で医療に従事することができたのも、これまでの様々な先生方のご配慮とご指導のおかげであると感謝しております。これらの経験を生かして今後も、臨床・研究・教育においてさらに自己を磨き業績を積み重ねていきたいと考えております。昨今、高齢化社会が急激に進むなか、福岡大学筑紫病院の医療圏ではそれ以上のものがあり、地域住民の皆さまに少しでもお役に立てるよう頑張っていく所存です。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

第40回 医学部慰霊祭

第四十回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十五年十月十九日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された三十一柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた三十八柱、合わせて六十九柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、久保真一医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて六十九柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。



教室だより

Letter from a classroom



耳鼻咽喉科学



当科は教育病院であるため、日常診療で診ることが多い急性中耳炎や扁桃炎から、大学病院ならではの悪性腫瘍の進展例に至るまで耳鼻咽喉科疾患全般にわたり幅広く対応を行っています。耳鼻咽喉科領域は元来、耳科、聴覚、平衡、鼻科、アレルギー、口腔咽頭、喉頭、音声言語、嚥下、頭頸部と広い範囲を網羅しているため、診療する疾患も突発性難聴や顔面神経麻痺、鼻出血、異物、外傷、炎症、腫瘍など多岐にわたっています。悪性腫瘍症例に対しては、放射線科、外科、形成外科、脳外科、口腔

外科など他科のご協力のもと、手術・放射線・化学療法を併用した集学的治療や再建手術、頭蓋底外科手術を行なっています。

外来では前述のように耳鼻咽喉科疾患全般に対応しています。市中のクリニック・病院では難しい精密検査も多く行っています。画像検査はもとより、種々の聴覚検査や平衡検査、音声検査、嗅覚・味覚検査、嚥下内視鏡・造影検査、顔面神経麻痺の予後判定など行っています。小児難聴に関しては、県内の難聴関連施設や教育機関とも連携しており、乳児から学童期までひろく診察しております。小児の人工内耳装用児やその保護者、教育療育担当者、九州大学病院スタッフと年に2回福岡難聴児支援の会を行っており、地域としての活動にも貢献しております。

初期臨床研修制度により、全国的に耳鼻咽喉科医を目指す研修医の減少がみられており、マンパワーの不足が懸念されています。しかし、当科では、ここ数年は数名ずつ入局があり、改善の兆しがみられるようになりました。今後、魅力のある科であることを医学生、初期研修医に知ってもらい、耳鼻咽喉科を目指す医師を確保する努力が必要と考えています。

耳鼻咽喉科の魅力としては、聴覚・平衡覚・味覚・嗅覚・話す・口から物を食べる、など人のQOLに関する重要な感覚器や機能を扱っている事が上げられます。このように感覚や機能障害への対応・治療の充実のより一層の発展が必要であり、耳鼻咽喉科の更なる向上、ひいては高い質を保つ当院への寄与につなげていければと思っています。

教室だより

Letter from a classroom



福岡大学筑紫病院

内分泌・糖尿病内科

当科は、旧内科第二が再編されることによって平成22年10月1日付で開設された新しい科です。糖尿病・内分泌疾患を専門にしていますが、生活習慣病全般、すなわち高血圧・脂質異常症・肥満・メタボリックシンドローム・痛風（高尿酸血症）なども総合的に診断・治療をおこなっております。また、日本糖尿病学会認定教育施設でもあります。

現在外来は新患・再来とも月曜日から土曜日まで毎日おこなっています。糖尿病専門医および看護師、栄養士、薬剤師、検査技師など他職種のスタッフが協力して、血糖コントロールのみならず糖尿病合併症の検査・診断・治療や個人栄養相談・糖尿病教室・インスリン導入・持続皮下インスリン注入療法・血糖自己測定指導、さらには計画妊娠指導や糖尿病透析予防指導までを効率よくチーム医療としておこなえる体制ができています。糖尿病診療のエキスパートである日本および福岡糖尿病療養指導士を取得したメディカルスタッフも増え、よりハイレベルな診療に向けてますますパワーアップしているところです。

病棟では毎週木曜日午後他科入院中の患者も含めた症例カンファレンス・病棟回診・抄読会をしています。さらに毎週水・金曜日には学生や糖尿病に興味のある研修医・助手・助教対象にミニレクチャーもおこなっています。また近隣の医療関係者も出席可能な院内勉強会・講演会なども多く開催しています。

臨床研究としては地域の先生方とのネットワークによる糖尿病治療に関する大規模臨床スタディを複数おこなっております。また持続皮下グルコース測定システムで得られるデータの新たな解析法をもちいた精密な病態把握や経口血糖降下薬・インスリンの選択や量の調整のアルゴリズム作成にも取り組んでいます。さら

に地域医療支援の立場から、患者さんの通院意欲維持・脱落防止やかかりつけ医に対し効率的なガイドライン診療を可能とするための支援および患者-かかりつけ医-専門医の連携強化などを統合的におこなうサービスの提供を始めました。基礎研究としては難病である全身性中性脂肪蓄積症（中性脂肪蓄積心筋血管症）における細胞内糖・脂質代謝および臓器障害の機序の解明にも成果を上げてきております。

福岡大学病院内分泌・糖尿病内科をはじめ、九州大学病院内分泌代謝・糖尿病内科および心療内科なども人事交流をおこなっており、今後の教室の発展に生かされていくと思います。

平成24年の「国民健康・栄養調査」によると「糖尿病が強く疑われる者」は950万人と増加の一途をたどっています。失明・透析・下肢切断・心血管疾患をもたらす糖尿病合併症を予防するためには良好な血糖コントロール達成・維持が基本であり、より早期からの食事療法・運動療法の徹底、インスリンを含めた積極的な薬物療法の導入などが求められるようになってきています。当科ではこれらの要請に今後も真摯に答えていく所存ですのでよろしくお願いいたします。

